プルウォルジョの観測地　　1983,6,11

東京理科大学天文研究部日食観測隊（ジャワ隊）　内田　信

ジョクジャカルタから西へ約６０㎞。皆既中心線上にプルウォールジョという村がある。車で約１時間２０分程、また、ボロブドール遺跡から約４０分程の地点である。

東経１０９°５４'４５"　　南緯　７°４２'４５"

軍の演習場の広い場所で、東西約１００ｍ、南北約３００ｍ、周囲はかなり見晴らしが良く、邪魔な物は無い。普通の草原で、地面も望遠鏡を立てるのに困らない程度の固さである。

日食の観測の為に、バナナの葉でふいた屋根を持つ柱だけの小屋が建てられ、ビール等冷たい飲み物を売っている。さらにガードマン用の小屋も２ヵ所程建ててある。敷地の中程に現地人と観測隊等を分ける境界があり、外国隊の邪魔にならないようにしてある。がその外国隊用の敷地に入るのには、場所代として、１人５ドルを納めなくてはならない。

観測は日食の前日から、もうすでに始まっている。この敷地内の何処を使うか、他の隊と、どのように接触するか等である。東西線や、南北線を引き曇空の中リハーサルを計画し、機材を組んでいる隊や、場所をとることに専念している隊、ただ、下見だけで済ましてしまった隊等がある。前日は、約５隊が、下見に来ていたようである。

当日、私自身はこの地の最北端にいたため他はどのような隊が来ていたかはっきりしないが、１０ｍの気象観測用ポールを立てている東京理科大隊、秒信号を発振している明治大隊、滋賀大隊、近畿日本ツーリスト隊、星の家隊等々、それに、ちょっと見ようか族も集まり、約300人位の人が集まっている。それも、ほとんど日本人である。

なんと、日本語のアナウンスまで聞えてくる。実際の観測が始まると何とも邪魔になりそうな放送である。幸い、第一接触以前に、その放送をやめてもらったが。

第一接触後は、各隊、各個人がそれぞれの観測を行なう。比較的冷静であったようだ。お互いの立場を考慮し、干渉しなかった。

第二接触のダイヤモンド・リングの時はシャッター音が響くだけで人の声すら聞こえない。

コロナが見えた瞬間、あちらこちらから拍手が湧き起る。５分を超す皆既時間も、気が付くともう終ってしまう。

第三接触、いつものように、「終ってしまった」という脱力感。何処からか、校歌を歌っている声が聞こえてくる。「まだ終っていない」と必死にシャッターを押している姿も徐々に少なくなっていく。

第四接触以前にすでに機材を片づけ始めている隊もある。全て終了後も、気象の変化を見ている理大隊が残って観測を続けていた。

地元も協力的であった。終了後、歓迎会と称し有料の昼食会を開いてくれ、また、太陽を呼び戻す踊り等を見せてくれた。また、日食中は、現地の人はほとんど観測隊と接触しなかった。

前日迄の天候の悪さも、ここで完全に晴れ全日食の経過が見れたことは非常に幸運だった。この場でまた新しい仲間を持てたことが一番の収穫だったのではないだろうか。誰もが満足をしてプルウォールジョを引き上げていった。